

祈りの諸問題 第2回

□ 「祈りの諸問題」のアウトライン

1. 誤った祈り
2. 祈りと 神の摂理
3. 祈りと 神の偉大さ
4. 祈りと 神の全知
5. 祈りと 神の主権
6. 祈りと 自然の法則
7. 祈りを妨げるもの
8. 聖書箇所での誤った適用
9. 祈りが答えられないことについて

本日は、第5から第7の3つの問題を扱います。

□ 第5 祈りと神の主権

1. 神が主権者であり、すべてのことをあらかじめ神が決定するのであれば、私たちは祈る必要はあるのか
2. エペソ1:11 また、キリストにあって、私たちは御国を受け継ぐ者となりました。すべてをみこころによる計画のままに行う方の目的にしたがい、あらかじめそのように定められていたのです。
 - (1) この箇所によれば、すべてのことは、あらかじめそのように定められている。それならば、なぜ祈るべきなのか。
 - (2) その答えは、次のとおり・・・神がそのみこころを行うときに用いる手段が、信者の祈りである。その事例を次に見よう。
3. 使徒27章 14日間の嵐の中からの救出
 - (1) 使徒27:18~26 (天使からの告知 23~24節) 昨夜、私の主で、私が仕えている神の御使いが私のそばに立って、こう言ったのです。『恐れることはありません、パウロよ。あなたは必ずカエサルの前に立ちます。見なさい。神は同船している人たちを、みなあなたに与えておられます。』
 - (2) 使徒27:33~44 (パウロの祈り 全員無事上陸)
 - (3) パウロは天使から告知されていて、乗員全員が助かると知っていた。しかし、だからといって、パウロは祈らなかつたわけではない。パウロは、船に乗っている人々の安全を確信し、神に感謝して祈った。祈り、食事した後、全員が無事上陸。

- (4) 祈りは、神がそのみこころを行うときに用いられる手段である。神がすべてのことについてあらかじめ定めておられるというとき、そのすべてのこととは、事の結果だけではなく、その事をもたらす手段をも含んでいる。

□ 第6 祈りと自然の法則

1. 自然の法則は定まっている。祈っても自然の法則を変えることはできないのであるから、わざわざ祈る必要はあるのか
2. 答えは簡単である。神は全能である。神は自然法則を変えることができるし、聖書の記録によれば、そのようにしたことがある。
3. 【補足】事例 イサクの誕生 創世記 18 : 9~15 → 21 : 1~2、ヘブル 11 : 11~12

□ 第7 祈りを妨げるもの

私たちが祈ったとしても、神から祈りの答えを受け取ることができないようにしてしまうことが、9つある。

1. 罪

- (1) 詩 66 : 18 もしも不義を 私が心のうちに見出すなら 主は聞き入れてくださらない → もし私たちが悪しきことを思い描いているなら、あるいは罪に当たることを心の中で計画しているなら、私たちの祈りに神は答えてくださらない。

- 「見出す」・・・ヘブル語の意味は「手放さずに握っている」、「(習慣などに) 執着する」。「喜んで見つめる」。罪に浸る生活をする中で、その罪を楽しんでいる、喜んでいる状態である。

(2) イザヤ 1 : 13~15

- ① ささげ物、香の煙、新月の祭り、安息日、会合の召集、これらはすべてモーセの律法において神が命じたことである。ここでは、神は、それらを「忌み嫌う」、「耐えられない」、「憎む」、「重荷となり、それを担うのに疲れ果てた」とおっしゃる。
- ② 神が文字通りそれらのことを忌み嫌っておられるわけではない。ささげ物を持ってくる人々、ここでは「あなたがた」と呼ばれているイスラエルの民が、あまりにも儀式的形式的に律法を守っているだけであり、その一方では平気で罪を犯していたからである。
- ③ 彼らは、自分たちの罪を本当に悔い改め、その真実の悔い改めのしるしとして、動物のささげ物を持って来ているわけではなかった。彼らは単に儀式を守るだけ、その一方では罪の中に浸かって生活しており、その罪が彼らの祈りを妨げていた。
- ④ それゆえ神は宣言される。「あなたがたが手を伸べ広げて祈っても、わたしは

あなたがから目をそらす。どんなに祈りを多くしても聞くことはない。」

- (3) イザヤ 59 : 1~2 見よ。主の手が短くて救えないのではない。その耳が遠くて聞こえないのではない。むしろ、あなたがたの咎が、あなたがたと、あなたがたの神との仕切りとなり、あなたがたの罪が御顔を隠させ、聞いてくださらないようにしたのだ。
- ① 神が祈りを聞かない理由は、祈り手自身に罪があるためである。
 - ② 神は罪を許容することはできない、よって祈り手自身に罪があるなら、その祈りを神は聞かない。
 - ③ 祈り手の生活の中に罪があること、これは祈りを妨げる主要な原因である。

2. 他の人への無関心 (特に貧しい兄弟姉妹への)

- (1) 箴言 21 : 13 貧しい者の叫びに耳を閉ざす者は、自分が呼ぶときにも答えてもらえない。
- ① 私たち信者は、地域教会の中で貧しい兄弟姉妹が経済的に困窮して助けを求めたときには、その必要に応じて助けるべきである。無関心であってはならない。
 - ② もし、貧しい兄弟姉妹の叫びに耳を傾けないようであれば、その人の祈りには、神もまた耳を傾けてはくださらない。
- (2) ルカ 6 : 38 与えなさい。そうすれば、あなたがたも与えられます。詰め込んだり、揺すって入れたり、盛り上げたりして、気前よく量って懐に入れてもらえます。あなたがたが量るその秤で、あなたがたも量り返してもらえるからです。
- 今、誰かに何かを与えることは、将来、自分が神から何かを与えられることである。神は豊かなお方である。その方が与えてくださるものは、豊かなものである。
- (3) 【補足】「誰かに」何かを与える。その「誰か」とは、信仰の家族の中、貧しい兄弟姉妹が、第一優先である。
- ① ルカ 14 : 13~14 食事のふるまいをするときには、貧しい人たち、からだの不自由な人たち、足の不自由な人たち、目の見えない人たちを招きなさい。その人たちはお返しができないので、あなたは幸いです。あなたは、義人の復活のときに、お返しを受けるのです。」
 - ② ガラ 6 : 10 ですから、私たちは機会があるうちに、すべての人に、特に信仰の家族に善を行いましょう。

3. 神の律法に対する不従順

- (1) 箴言 28 : 9 耳を背けておしえを聞かない者は、その祈りさえ忌み嫌われる。
- (2) この文脈では、「おしえ」は、モーセの律法である。この箴言が記された時代は、

モーセの律法が生きていた時代だからである。

- (3) 今はモーセの律法は終了しており、私たち新約の時代の信者たちは、メシアの律法の下にある。
- (4) 箴言 28 : 9 の原則は、メシアの律法の下にある信者でも同じである。耳を背けてメシアの律法に従わないのであれば、その信者の祈りは聞かれない。

4. 偶像崇拝

- (1) エゼ 14 : 3 「人の子よ。これらの者たちは自分たちの偶像を心の中に秘め、自分たちを不義に引き込むものを、顔の前に置いている。わたしは、どうして彼らに応じられるだろうか」
 - ① 人の子・・・エゼキエル書では、神が、預言者エゼキエルを呼ぶときに、「人の子よ」と呼びかけた (エゼ 2 : 1)
 - ② これらの者たち・・・イスラエルの長老たち (14 : 1)
- (2) 当時のイスラエルの長老たちは偶像崇拝をしていた (エゼ 8 : 11~12)
- (3) その長老たちが来て、祭司エゼキエルの前に来て座った (14 : 1)。その目的は、主に尋ねるためである (20 : 1)。しかし、彼らの心の中には偶像崇拝に引かれており、実際に偶像崇拝を続けていた。そのような状態で祈っても、神は聞かれない。
- (4) 【補足】木や金属などで作られた偶像自体には力はないが、その背後に悪霊がいると、聖書は警告している (前回「祈りの諸問題①」2 ページ)。では、占い、姓名判断、風水などはどうか？ 旧約聖書では、そのようなことをする者は悪霊と交信する者として、強く警告している。悪霊の中には「占いの霊」(使 16 : 16) と呼ばれる悪霊もいる。信者は決して、近づいたり利用してはならない。

5. 赦す思いでないこと

- (1) マルコ 11 : 25 また、祈るために立ち上がる時、だれかに対し恨んでいることがあるなら、赦しなさい。そうすれば、天におられるあなたがたの父も、あなたがたの過ちを赦してくださいます。
- (2) 祈ることは、神に近づくことである。このとき、もし自分の心の中に誰かに対して恨む思いがあることに気づいたら、祈る前にまず、「私はその人を赦します」と心の中で言うこと、赦す思いを持つことが大切である。
- (3) 【補足】
 - ① このとき、「赦したくない」、「赦せない」という思いが突き上げて来ることがある。これは、信者の心の中にある罪の性質である。罪の性質は、信者が肉体の死を迎えるまで消えることはない。それを消すとか、小さくしようとすることは無意味である。人の力や決心では無理だからである。
 - ② 「赦したくない」、「赦せない」という思いが突き上げてきても、無視して、「私

は、主イエスにあって、赦します」と宣言する。ほとんどの場合、これで苦しい思いは鎮まり、突き上げてくることはなくなる。

- ③ それでも「赦したくない」「赦せない」という思いが突き上げてくるなら、父なる神の前に、「赦すことのできない、このことは私の罪です」と自分の罪を言い表す。それによって、その罪から清めていただくと、神との交わりが回復され、神からの平安と力が与えられる。
- (4) 赦す思いでいること、これは自分のためである。そうすることで、祈りが神に聞かれるからである。

6. 疑い、信仰の欠如

- (1) ヤコブ 1:6~7 ただし、少しも疑わずに、信じて求めなさい。疑う人は、風に吹かれて揺れ動く、海の大波のようです。その人は、主から何かをいただけると思ってはなりません。
- (2) 6節 「求めなさい」—何を？ 5節の約束を、である。「あなたがたのうちに、知恵に欠けている人がいるなら、その人は、だれにでも惜しみなく、とがめることなく与えてくださる神に求めなさい。そうすれば与えられます」
- (3) 神が与えると約束してくださったことは、必ず与えられる。そのことを疑わずに信じて求めなさい、というのが6節である。決して、信者が自分の思いで願うことではない。私たちが、疑わずに信仰をもって祈ることができるのは、神の約束を握ったときである。
- (4) 神の約束に基づいた祈りの内容であるのに、それを疑ったり、確信がないまま祈るなら、その祈りを神は聞かれない。

7. 間違った求め

- (1) ヤコブ 4:3 求めても得られないのは、自分の快樂のために使おうと、悪い動機で求めるからです。
- (2) 善い動機とは何か、自分の快樂を追うとは対極にあるもの、それは神の榮光を求めるといふ動機である。たとえば、車を与えてくださいという祈りにしても、その動機がどこにあるか、である。
- (3) 地域教会の中には、「祈るときには、欲しいものをできるかぎり具体的に特定して祈るように」と、勧めることがある。それは、間違った求めである。

【補足】そのような勧めは、人の欲望を駆り立てる傾向がある。また、信仰を、自分が望んでいるものを得るための手段であると誤解させる危険がある。要注意である。

8. 妻への愛の欠如

- (1) I ペテ 3:7 同じように、夫たちよ、妻が自分より弱い器であることを理解して、妻とともに暮らしなさい。また、いのちの恵みとともに受け継ぐ者として尊敬しなさい。そうすれば、あなたがたの祈りは妨げられません。
- (2) 夫たちの祈りが妨げられる原因は二つある
 - ① 自分の妻と暮らすにあたり、理解と知識を伴っていないこと。どういう理解や知識かということ、妻が何を必要とし、何を欲しているか、である。
 - ② 自分の妻に対して、夫が示すべき尊敬をはらっていないこと。
- (3) 一言で言うと、妻への愛が足りないことである。愛には、理解と尊敬が伴うものである。夫は、妻を聖書的に愛することを学ばねばならない。そうすることで、祈りが神から答えていただけるようになる。

9. 罪責感を抱えたままの心

- (1) I ヨハ 3: 19~22 そうすることによって、私たちは自分が真理に属していることを知り、神の御前に心安らかでいられます。たとえ自分の心が責めたとしても、安らかでいられます。神は私たちの心よりも大きな方であり、すべてをご存じだからです。愛する者たち。自分の心が責めないなら、私たちは神の御前に確信を持つことができます。
- (2) 20 節「たとえ自分の心が責めたとしても、安らかでいられます。」とあるが、信者は時として「安らかでいられない」ことがある。それは、罪責感を抱えたままのときである。その解決のためには、自分の心の中の罪の性質を何とかしようとしたり、何かの奉仕活動で穴埋めしようとしても無駄である。解決は、神のみができる。20 節「神は私たちの心よりも大きな方であり、すべてをご存じだからです」
- (3) 自分の心が責めたとき、私たちは次のことを受け入れよう。
 - ① 神は私たちを赦してくださっている。
 - ② 神は私たちを清めてくださっている。
 - ③ 神は私たちを受け入れてくださっている。
 - ④ 神は私たち一人ひとりに、神のご計画の中で、それぞれ特別な立場を与えてくださっている。
 - ⑤ 私たちが祈ること、これは神のご計画を進めるとき的手段として神が組み込んでおられる。だから、臆することなく前に進み出て祈らなければならない。
- (4) 罪責感をもち続けるのは間違っている。それは祈りを妨げるものである。それを神に差し出して解決していただこう。そうすれば、22 節「愛する者たち。自分の心が責めないなら、私たちは神の御前に確信を持つことができます。」